第2分科会

Ⅰ 学校経営／組織・運営

学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営

丸岡城（坂井市）

組織・運営

コシヒカリプロジェクト・田植え体験

1　研究課題

学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校運営

2　趣　旨

急速な技術革新、グローバル化の進展、人口減少・高齢化の進展等、変化の激しい予測困難な社会が出現している。このような時代において、子どもたちが、夢や希望の実現に向けて、主体的に生き抜く力、他者とともに生き抜く力を育成することが学校教育に求められている。

校長は、このような新しい時代を生き抜くための能力・資質、課題等を把握し、様々な教育課題に対して明確な経営ビジョンをもち、強いリーダーシップを発揮する必要がある。

校長が示す学校経営ビジョンを実現するためには、学校経営ビジョンを具体的に示すこと、繰り返し伝えること、全教職員で共有すること、一人一人に自分のこととして捉えさせることが重要である。また、運営組織の力を最大限に発揮できるよう、個々の教職員の能力・資質、専門性等を生かすこと、教職員が学び合いながら協働して実現すること、教育活動の点検と見直しを確実に行うことなど、活力ある組織づくりと学校運営が重要である。さらに、様々な教育課題に積極的かつ柔軟に対応するために、家庭・地域・外部等と連携・協働して学校運営にあたることが重要である。

本分科会では、校長の示す学校経営ビジョンの実現を図るための活力ある組織づくり及び組織を積極的に運営していくための具体的方策と成果を明らかにする。

3　研究の視点

（1）学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくり

全教職員が「チームとしての学校」の理念のもと教育活動に当たることができる活力ある組織づくりをするには、まず、校長が新しい時代と自校の課題を的確に把握し、将来を見据えた明確な学校経営ビジョンをもたなければならない。そして、学校経営ビジョンの実現に向けて、教職員一人一人の能力・資質、特徴、専門性を正確に把握し、適材適所に配置し、教職員がもてる力を最大限に発揮できる活力ある組織づくりを進めなくてはならない。

このような視点に立ち、学校経営ビジョンを具現化するために、活力と実行力のある組織づくりに向けた校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

（2）組織を積極的に運営していくための具体的方策の推進

組織を積極的に運営していくためには、明確な学校経営ビジョンを丁寧に具体的に提示し、全教職員の共通理解の下、同じ目標に向かって教育活動を推進することが重要である。また、教職員が自己有用感をもち、生き生きと活躍できる活力ある組織づくりをし、一人一人が組織の一員である自覚をもち、主体的かつ協働的に教育活動を推進できるよう、組織力を高めていくことが重要である。そして、学校経営ビジョンを時期をおいて繰り返し伝えること、PDCA サイクルの点検と見直しを確実に行って学校運営を推進していくことが重要である。さらに、家庭・地域社会の願い、学校の教育課題を学校、家庭、地域社会で共有し、連携を機能させるコーディネーターとしての校長の役割も重要である。

このような視点に立ち、学校経営ビジョンの実現を目指して、組織を活性化させる校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

研究の視点　学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくり

研究発表題

活力ある組織づくりに有効な校長の関わりと手立ての工夫

石川県小松市立荒屋小学校長　**亀田　郁代**

Ⅰ　研究の趣旨

自校の教育目標を実現していくために策定した学校経営ビジョンをどのように教職員や児童に浸透させ命を吹き込むかは、年度当初からの校長の大きな役割である。

小松市小学校長会では昨年度、「活力ある組織」とは、「教職員間で共有された明確な目標と方策のもと、PDCA サイクルを機能させ、実現に向けて全教職員が主体的・協働的に参画する組織」と定義して、研究を進めてきた。その結果、「PDCA サイクルをいかに有効に回すか」「いかに個に応じた人材育成を図るか」が課題としてまとめられた。この点を中心に据えて、各校の実態や課題に応じた取組を行ってきた。

研究の視点として PDCA サイクルをいかに有効に回すかを明確にし、個に応じた人材育成に有効な方策と校長の働きかけについて検証・考察する。

Ⅱ　研究の概要

市内全 23 小学校長に、以下の２点についてアンケートを実施した。

1　PDCA サイクルの機能化に向けての取組と校長としての働きかけの成果と課題

2　個に応じた人材育成と校長としての働きかけの成果と課題

アンケート集約の結果を表に整理し、市内の全小学校長に有効な取組を紹介するとともに校長の役割について考察した。

アンケート結果の取組内容とその成果について紹介する。

第３研究部会「学校経営ビジョンの実現を図るための組織づくりと組織運営」アンケートまとめ

	PDCAサイクルの機能化に向けての取組と校長としての働きかけ	
	取組	成果
重点化	・校内研修で校長ビジョンを基に重点を全員参加でキーワード化(芦城小) ・集会や掲示でスローガンの明確化と職員児童との共有化（粟蔵小） ・重点化した項目に絞った検証を行い、より具体化できるようにした。 ・キーワードの一つを「振り返り」として学校評価の項目にも上げて意識化（那谷小） ・つけたい力を意識して、行事や授業等を行っている。	・重点項目が様々な目標に反映され、全員で取り組む意識が高まった。 ・教育活動実施後振り返りをし、次年度の計画へとつなげることができている。 ・行事等の提案の際、重点項目を意識した仕掛けや指導・評価がなされるようになった。 ・職員に浸透しやすく、よりよい改善につながった。 ・児童、教職員ともに意識が向上し、目的に応じて振り返りの方法をとっている。 ・授業視点シートなどを活用しての授業の見直しや整理会の工夫につながった。
会議の工夫	・経営会議（月1回）で校務分掌部会代表が検証結果を報告し、今後の方策を検討・確認 ・企画会議で学校ビジョン実現への進捗状況を話し合い、分掌部会で具体的な取組を話し合わせる。（　　小） ・職員会議で進捗状況、課題、改善の検討 ・週末に短時間で主任会を開催 ・校務分掌部会を活用し、教育活動が学校ビジョンの実現に有効に働いているかの検討	・各担当が、今年の重点達成を意図した新規事業を提案する姿が見られる。 ・共通実践が円滑に進んでいる。 ・見通しを持ち、学校運営に寄与している。 ・教職員の主体性が高まった。 ・意識して振り返り、次年度の計画に活かす反省もできた。

（アンケート結果のまとめ　部分）

1　PDCA サイクルの機能化に向けた有効な取組と校長としての働きかけ

(1)　校長講話や校長便りによる意識づけ

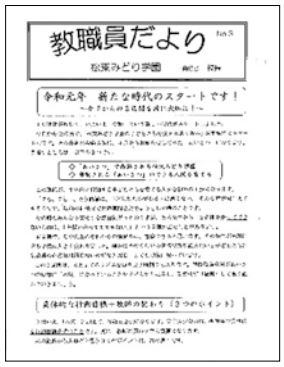
集会や掲示でスローガンの明確化と教職員・児童との共有化を図った。

ア　教職員･児童が校長講話を聞くことによって、全員で取り組む意識が高まり、全校集会で訓話した後は校長掲示板に掲示することで、常に意識化を図り、振り返る姿勢が見られた。

（校長講話）

（掲示板）

イ　校長だよりを教職員に向けて適宜発行した。校長の思いをタイムリーに伝えることにより、共有化を図るうえで有効であった。



(2) マンダラチャートの活用と修正

昨年度、児童も教師も行きたくなる学校を創るという目標実現のため、教職員一同で作成し、学期ごとに改善を図った。様々な教育活動が子どもにどんな力をつけることにつながるのかが一目で把握でき、校長ビジョンを具現化することができた。

今年度は、学校経営ビジョン実現に向け、各主任を中心に、昨年度活用した「マンダラチャート」の見直しを図った。今年度においても昨年度の取組をもとに、今年度の重点と方向性を明確にし、「行きたい学校創り」を具体的にどのように進めていくのかを、全職員で共有した。今後「マンダラチャート」をもとに進捗状況を確認すると共に、取組の見直しを図っていく。

また、「マンダラチャート」をもとに「学校評価」「学校力向上ロードマップ」「カリキュラムマップ」を作成しており、より効果的なPDCA サイクルの確立が期待できる。

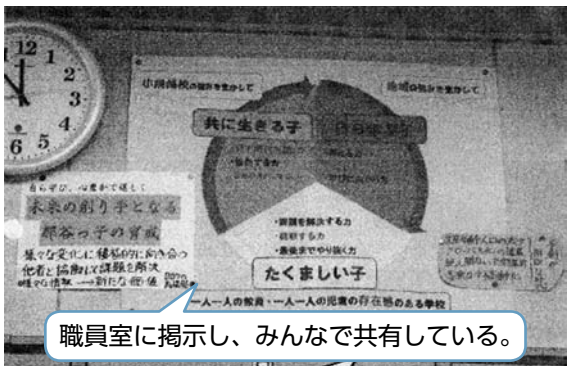
（マンダラチャート 2019 版）

（マンダラチャート 2020 版）

(3) 学校評価への位置づけと活用

誰が・いつ・何をするのかを計画表に明記し、企画委員会等で定期的に進捗状況をチェックした。キーワードの一つを「振り返り」として学校評価の項目にも上げて意識した。計画的な取組と迅速な見直し・改善をすることができた。

また、アンケートの結果を職員室に掲示し、教職員みんなで共有した。また、児童にも意識してもらえるように児童の目に触れる掲示板にも掲示した。児童･教職員ともに意識が向上し、目的に応じて振り返る方法をとっている。



(4) 学校力向上ロードマップの活用

ロードマップを各部で分担して作成し、担当者名を入れて掲示した。組織的に見通しをもって取り組むことや、検証を次につなげることができた。

ロードマップを拡大して掲示し、マーカーを入れながら、進捗状況を確認することによって教職員の共有化が図られた。

(5) 指導計画綴りの有効活用

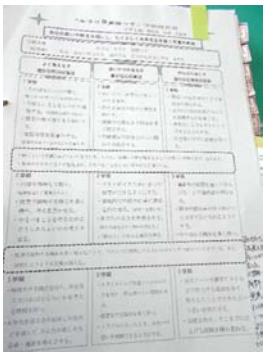
指導計画綴りに学校研究や授業改善の具体的取組、校務分掌年間計画や学級経営案等を綴らせ、学期や月ごとに振り返らせ次への方策を立てさせた。

ア　週案

毎週（毎月）一人一人にコメントを書き、意図的に働きかけた。校長としても教職員の働き方を意識してみるようになった。

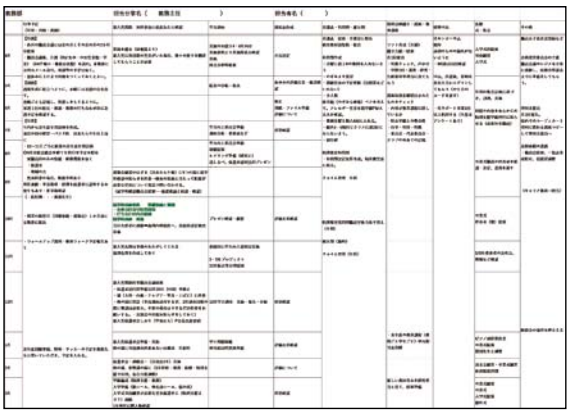
イ　学級経営案

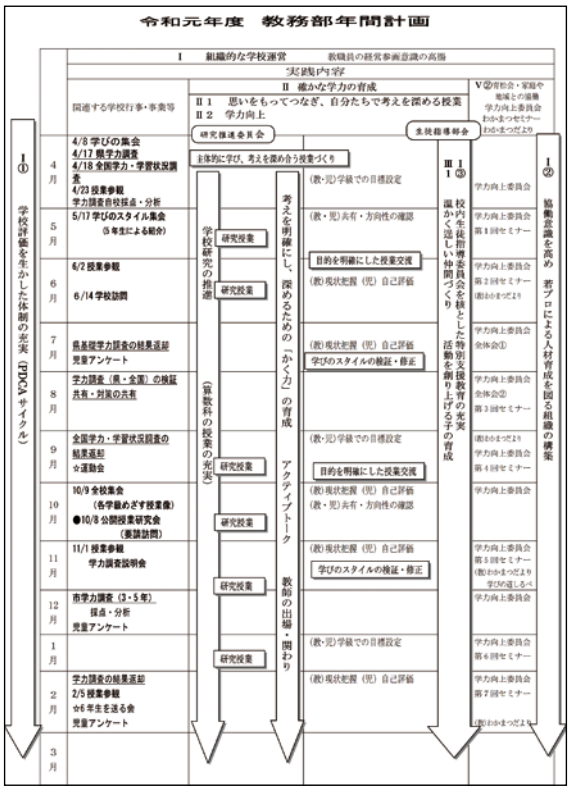
学級経営案を学期ごとに成果、課題、手立てを書いて提出させた。計画的継続的な取組と実施の確認ができた。



ウ　校務分掌年間計画

特に校務分掌年間計画は何をするかが明確であり、校長ビジョンの具現化に向けてチーム力が高まった。また、初めての主任に作成させることで、年間の見通し持つことができて安心感が生まれた。





2　個に応じた人材育成に有効な方策と校長としての働きかけ

(1) 実施体制を工夫したOJT

メンター制(ベテランと若手､主任と若手)の他、分掌によっては若手同士で組ませることも行った。また、分掌担当者の複数化といった組織づくりの工夫も学校の実態に応じてなされた。

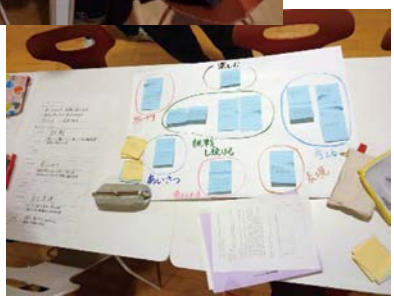
ベテランが若手を支援し、若手がベテランから学ぶばかりでなく、若手の行動がベテランの行動を促す効果もある。協力協働の意識の高まりや、若手の活躍場面が増えて、全体の参画意識も高まった。上手く機能したときの効果は大きい。

（会議の工夫）

（若手が講師となって）

(2) ボトムアップ

教職員一人一人から教育活動の改善意見や児童に付けたい力を集約する機会をつくり、学校経営ビジョンに反映させて、熱意をもって丁寧に説明した。教職員は学校経営ビジョンをより自分事として受け止めるようになり、参画意識の高まりが見られた。



(3) キャリアステージを意識した若プロにおけるテーマと時期の工夫

コーディネーターが、若手教員を含む教員の困り感を調査して個別または、グループによる研修プログラムを作成し、それぞれに担当者を決めて実行するようにした。研修報告の機会を設定し、若手も講師を務めさせた。ニーズに合わせたOJTを実施でき、若手の発信機会となった。

(外部講師を招いて)

(若手同士で)

(若手のニーズで)

(必須課題で)

(5)年間計画　(全体に係るもの)

日	内容	講師	対象
4月3日	学級経営について	校長	全教員
4月4日	アナフィラキシ対応	養教	全職員
4月23日	道徳　授業づくり①及び道徳ノートの使い方	北川	若手教員及び希望者
5月20日	困り感のある児童への対応について	担当者	全職員
5月24日	テントの立て方について	体育	初任及び女性教員
6月19日	プール機械操作について	体育	若手教員及び希望者
7月1日	道徳　評価の書き方について	北川	全担任
8月29日	研修報告 学力向上フォーラム報告 ヒアリング報告　一問分析について	 田中 奥村	全職員
8月30日	研修報告 音楽科　授業の基礎基本 体育科　体づくり運動・器械運動について 小中連携による外国語活動について 今、求められる社会化教育について カリキュラムマネージメントについて プログラミング教育　実習 自殺予防教育について 不登校・児童虐待について オリンピックアスリートに学ぶ 南加賀古墳群について	 中村 北村 林 校長 校長 高木 北村 中川 北川 北村	全職員
9月4日	非常ベル対応　火災時の機械処理	ほくつう	全職員
9月5日	救助袋の片づけ方講習	藤田	若手教員
10月2日	人間関係づくり　研修	県教研センター	全教員
10月4日	食物アレルギー対応研修	養教	全教員
0月18日	器械運動校内研修	北村	全教員
1月12日	新学習指導要領　評価について	筒井CCO	全教員
1月15日	生徒指導研修	木下SSW	全教員
1月29日	指導要録の電子化について	新学社	全教員
2月17日	食物アレルギー対応	山瑞栄養教諭	養教・担任
1月8日	新プリンターの使い方ダウンロード法	宮嶋市教研セ	全教職員
1月14日	一問分析について	教務	全教員
2月予定	道徳模擬授業	教頭	全教員
2月予定	効率的な事務処理のコツ	北村	若手教員

(若手研　年間計画および実施記録)

Ⅲ　まとめ

1　成果

PDCAサイクルを如何に有効に回すかについては、明確なビジョンを教職員や児童に熱い思いで伝え、理解・浸透させ、不断の組織マネジメントを行うことが重要である。進捗状況の確認の時期、方法について全教職員で共有し、PDCAサイクルが有効に働くシステムを確立することが有効である。その際、取組を通して教職員も児童も達成感を味わえるよう努めたい。

いかに個に応じた人材育成を図るかについては、若手のニーズに合った研修プログラムの設定や、活躍の場の設定があげられる。またベテランもキャリアステージにあった課題意識をもち参画意識を高め達成感につなげることが大切である。

2　課題

今後の課題として、働き方改革を推進しつつより効率的にPDCAサイクルを回すにはどうしたらよいか、教職員一人一人のモチベーション向上につながる有効な人材育成の在り方とは何かがあげられる。今後、時代のニーズに合わせた取組を探り、活力ある組織づくりができるよう努めていきたい。

研究の視点　組織を積極的に運営していくための具体的方策の推進

研究発表題

学校間連携及び地域との連携による組織の活性化

福井県坂井市立長畝小学校長　山本　一郎

Ⅰ　研究の趣旨

近年、学校教育の質的充実に対する社会的要請の高まりや複雑化・多様化する教育課題の出現、さらに教員が本来の職務である学習指導や生徒指導に専念することができない状況など、学校は多くの問題を抱えている。さらに、グローバル化の進展により世界が急速に変化する中、我が国では少子高齢化が進み、経済や産業においても様々な問題を抱え深刻さを増してきている。

こうした状況の中で、我が国がこれからも持続可能な社会を実現していくためには、「教育」こそが今後の発展のための重要な基盤になると考える。そして、日本の将来を支える子どもたちに、この時代に必要な資質・能力を身に付けさせることは、学校教育の責務であると考える。

将来を見据えた活力ある組織をつくり、積極的に運営していくためには、校長が確固たる経営ビジョンのもとに強いリーダーシップを発揮していくことが当然必要であるが、各学校が独自で取り組むには限界がある。効果を上げるためには、各小学校間の連携や中学校との連携、さらに地域との連携が必要不可欠であると考える。

坂井市内には中学校が５校、小学校が 19 校あり、各中学校区ごとに連携し、それぞれの中学校区校長会を中心に、機動的な運営体制を構築し、組織的に研究・実践を進めている。また、各小学校区内には、「まちづくり協議会」という地域団体があり、学校との結び付きが非常に深い。

そこで、学校間連携及び地域との連携による体制を強化することにより組織を活性化し、学校力を高めていきたいと考えた。そのために取り組んできた実践を述べていきたい。

Ⅱ　研究の概要

１　学校間連携による取組

本校を含む中学校区には三つの小学校があり平成 28 年度と 29 年度の２年間、国立教育政策研究所より、小中連携による「魅力ある学校づくり調査研究事業」の指定を受けており、様々な取組を実践してきた。

平成 30 年度以降も規模は縮小したものの、「学力向上部会」「学校生活向上部会」「絆づくり部会」「小中交流部会」の４部会については取組を継続している。各部会の部長を校長が務め、毎月の校長会で各部会の方向性や進捗状況について検討を重ねている。各部会の主な取組については以下のとおりである。

(1) 学力向上部会

平成 28 年度から継続して、「よくわかる、楽しい授業づくり」と「主体的に授業に取り組む児童生徒の育成」による魅力ある学校づくりを推進している。

ア　学習指導の共通化

中学校区の三つの小学校の児童のほとんどは同一中学校へ進学するので、中学校とのつながりを意識して、各校の基本的な学力向上の方策を共通化し指導しておくことは、中学進学後も戸惑いなく学習に主体的に取り組むために重要である。そこで、各校の学習指導について情報交換を行い、各校で共通して取り組む方策を「丸岡 学力向上スタンダード」として明確化した。そして、各校が共通理解のもとで指導することにより、小中のつながりのある学びの実現を図っている。

《丸岡　学力向上スタンダードの柱》

○「めあて」の提示

○「まとめ」の活動の設定

○「ふりかえり」の活動の設定
○「自主学習」のすすめ
○相互参観による教員の学び合い

イ　自主学習の充実

主体的な学びの姿勢をつくるために、自ら設定した課題に取り組む自主学習を、小学校３年以上から中学校まで推奨している。その際、次の点を各校で指導している。①「家庭学習の手引き」を通して、課題の例を示したりノートの使い方を指導したりする。②よい取組のノートを紹介したり、中学生のノートを小学生に示したりする。このような働きかけを共通して行い、学習意欲の向上を図っている。

ウ　学校相互の研究授業の参観

小中のつながりのある学びを実現するために小中の連続性とそれぞれの特性を相互の教員が理解し、学習指導を改善していくことが大切である。そこで、各校の指導主事訪問日を利用して、その日に行われる研究授業を参観するようにしている。小学校の教員は中学校の研究授業を、中学校の教員は小学校の研究授業を必ず参観する。さらに、小学校の教員へは、他の小学校の研究授業を参観することも勧めている。

(2) 学校生活向上部会

ア　学校のきまりの基準統一

学力向上部会での学習ルールの統一同様、学校のきまりについても、おおまかな基準について統一を図っている。特に長期休業前には、各校のきまりを再確認し、共通理解の下で指導の徹底を図っている。

○ SNS の利用（スマートルールの作成等）
○自転車のルール（許可学年、乗車範囲、ヘルメットの着用等）
○遊び（子どもだけでの活動範囲、帰宅時間、禁止事項等）
○その他

イ　無言清掃の徹底

校区内の中学校では、20 年近く前から「思いやり清掃」という名称で、ただ単に学校をきれいにするだけでなく、清掃活動を通して自分自身も磨き上げるということに重点を置き、生徒の「がんばる心」「気づきの心」そして「感謝の心」の育成に取り組んでいる。黙想から始まり無言で清掃に取り組んでおり、地区内外から高い評価を得ている。いずれこの丸岡中学校に進学する三つの小学校においても、無言清掃を推進し、少しずつではあるが定着してきている。

ウ　中学生による母校での挨拶運動

中学校１年生が、登校途中に母校に立ち寄り児童玄関で挨拶運動を行っている。1学期と2学期にそれぞれ1回ずつ行っているが、希望者が多い場合は日数を増やして対応している年もある。

小学生にとっては懐かしい対面となり、うれしそうに挨拶を交わす児童が多く見らる。中学生にとっても、母校の先生方に声をかけられたり、頼もしく成長した姿を見せることができ、自己有用感を高める上でも大変効果的である。

(3) 絆づくり部会

不登校の未然防止、気がかりな児童生徒への対応など、児童生徒の心に寄り添い絆を深めるため、教職員が連携して取組を行っている。

ア　ポートフォリオの作成

自己肯定感を育てるポートフォリオを「宝物ファイル」と称して全学級で取り組んでいる。

まず、各学校で「ポートフォリオ」に関する研修会を開き、取組に対する共通理解を図った。その後、全学級で子どもたちが自分の宝物と考える作品やワークシートなどをファイリングし、子ども同士や保護者と対話活動を行った。４年生以上は年度末にファイルを整理し、次の学年に持ち上がった。６年生は中学校へ持ち上がることにした。（現在は当該学年までで整理し、持ち帰らせている。）

イ　ピア・サポートの充実

中学校では、仲間同士での支え合い、助け合いの力を育てる「ピア・サポートプログラム」を全学級で実施した。

「ピア・サポートプログラム」で身に付けたスキルを生徒の行事の場で実践した。例えば、体育祭では、後輩への指導を行う前に、各色の応援団同士でどのように指導すると効果的かを学び合った。また、受験を控えた３年生は、効果的な勉強法について、小グループで教え合った。また、学年を超えて、自分たちの経験

を後輩に伝える活動を実践した。

小学校でも、相手の気持ちを読み取りながら、楽しく分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えて活動することにより、豊かな心の育成を図っている。

(4) 小中交流部会

ア　中学校生活体験

中学校への進学を目前に控えた６年生を対象に、毎年２月上旬に中学校生活体験を行っている。中学校の施設や授業の様子を見学したり、中学校教員による授業を実際に受けたりしている。午後は、いくつかのグループに分かれ、中学生から中学校生活についての説明を受けたり小学校間の交流を深めるレクリエーション等を実施したりしている。

中学校生活への見通しをもつことができ、４月からの入学が楽しみだという児童が多く見られる。中学校入学後の中１ギャップの解消にもつながっている。

イ　中学校行事への参加

例年、春と秋の２回の学校公開に合わせて実施されている「部活動見学会」には、週休日のため希望者のみの参加としているが、毎年多くの児童が参加している。部活動によっては簡単な体験も実施しており、中学校進学後の夢と希望を膨らませている。

また、11 月の合唱コンクールには、三つの小学校の６年生全員が鑑賞に出向き、中学生のすばらしい合唱に感動している。

２　地域との連携による取組

福井県では、子どもたちが郷土への誇りと愛着をもち、新たな活力を生み出す人材を育成することを目的として、「地域と進める体験推進事業」を平成 28 年度より実施している。

そこで、各小学校区の「まちづくり協議会」の方を地域コーディネーターに委嘱し、協議会とともに様々な特色ある事業を展開している。校長は定期的に開催される協議会の会議に出席し、学校側の要望を伝えるとともに地域との組織的な連携・協働体制の確立に努めている。各校の主な取組については以下のとおりである。

(1) A 小学校

ア　お城（丸岡城）の学習会

本校は学校のすぐ隣に「丸岡城」があり、全教室の窓からいつでもお城が見える環境にある。慣れ親しんでいるお城ではあるが、その価値を再確認するため、城丸部会（丸岡城のまち　まちづくり協議会）の協力を得て、「丸岡城」についての学習会を行っている。

５年生を中心に行われる学習会では、城丸部会の方からお城の歴史や造りについて詳しく教わり、実際にお城の中に入ってそれを確認している。子どもたちは、天守閣の最上階の窓から見える本校を眺めながら、改めて自分たちの学校がお城に見守られている有り難さを感じることができている。

年末には、地域の誇りである丸岡城に感謝の気持ちを込めて、お城の大掃除を行っている。平成 30 年度から同じく丸岡城を中心とした学習をしている近隣の小中学校や高校とも連携を図り、『丸岡城サミット』と題して、それぞれの立場から活動の成果を発表し合っている。このサミットを通じて改めてふるさと丸岡の良さを共有することができている。

イ　丸岡古城まつり総踊り

丸岡古城まつりは、例年 10 月、「丸岡城」周辺で開催されている祭りである。その祭りの一部として総踊りが開催されており、本校は児童、保護者、教職員がその踊りに積極的に参加している。

踊りは３種類あり、「丸岡音頭」「丸岡音頭新バージョン」、坂井市の姉妹都市である宮崎県延岡市の民謡「ばんば踊り」を音楽に合わせ

て踊り歩く。地域の祭りに参加し地域との一体感を感じることで地域を愛する心が醸成されている。

(2) B 小学校

ア　グラウンド芝の管理

本校では、グラウンドのフィールド内、約 2,700 ㎡を芝生化して利用している。昼休みには、多くの児童がグラウンドに出て、芝生の上を走り回ったり寝転んだりして大変賑やかに遊んでいる。

以前は、この芝生の維持管理を学校が中心となって行ってきたが、数年前よりまちづくり協議会の環境部会の方々が担ってくださっている。芝刈りや施肥、目土、休日の散水、さらにエアレーションや定期的な芝の張り替え等、人的な面でも費用の面でも非常に助かっている。

イ　地域の協力による学校行事の実施

本校では、地域人材活用の充実を重点目標の一つに掲げており、様々な教育活動において、まちづくり協議会の方々の協力を得ている。

○アユの稚魚放流（竹田川内水面漁協）
○ホタル観察会（安心・福祉部会）
○丸岡古城まつり総踊り指導（環境部会）
○親子ラジオ体操指導（ふれあい部会）
○地域の史跡巡りツアー（ふるさと部会）
○キッズカルタの作成（情報部会）

(3) C 小学校

コシヒカリプロジェクト

本校の校区には、コシヒカリの父と呼ばれる石墨慶一郎博士の出身地がある。その縁で、地域の農業の中心である稲作、コシヒカリをテーマに、５年生を中心に学習活動を展開している。学習に当たっては、JA 壮青年部やまちづくり協議会・歴史文化部会の協力により、田植えや稲刈りを体験したり、コシヒカリについての出前授業を受けたりしている。

学習したことを地域に発信するために、地域の方々も発表会に招待し、コシヒカリや地域の特色を発表したり、自分たちが収穫したお米を販売したりしている。お米のパッケージには学習したことを生かして自作したちらしが付けられている。

Ⅲ　まとめ

1　成果

(1) 地域の中で活動し、地域の人から学び、地域にその学びを発信していく過程で、児童は地域のすばらしさを、自分たちのものとして自覚できるようになった。また、地域を支えている人に触れ合い、自分たちも地域の担い手として期待されていることに気付く機会となった。

(2) 学校間連携においては、特に令和元年度末からの新型コロナウイルス対策において、その重要性を痛感した。市教委や市校長会からの大まかな指示を受け、中学校区間で細部まで打ち合わせて対策を講じることができた。

2　課題

(1) 各校での共通化した取組に、各校の実態に応じた独自の取組をどのように融合させていくかという点について、今後、研究を深めていく必要がある。

(2) 地域との交流においては、業務改善の観点から、行事を見直していく必要がある。校長のリーダーシップにより、地域への愛着や誇りを醸成できる行事を精選し、さらに組織を活性化させるとともに学校力を高めていきたい。